

Title	古典的価値学説と効用概念
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.2 (1925. 2) ,p.153(1)- 177(25)
JaLC DOI	10.14991/001.19250201-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250201-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250201-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 時事新報

曾て卒先十二頁を發行した時事新報は  
更に十四頁新聞の魁を致しました

購者の激増と共に紙の増有らゆる趣味を満足

させる爲めに紙面の拡張を感じたからであります

紙幅の擴大と内容の充實せる

點を考ふれば一ヶ月定價

一圓の時事新報は最當

且つ最廉の紙眼

であります

朝刊—十頁

夕刊—四頁

外に毎週漫畫附録



東京市橋區 時事新報社 電話 銀座五九三六  
東京市橋區 時事新報社 電話 銀座五九三六

三田學會雜誌 第十九卷 第二號

## 古典的價值學說と效用概念

高橋誠一郎

David Ricardo は少くとも其の「經濟學原理」(On the Principles of Political Economy and Taxation.) に於ては抽象の世界に行動せるものであつた。恰も彼れの時代は政治の全理論を以て、人間性に關する少數の單純なる公理より演繹せられ得るものと主張する「哲學的急進主義」(Philosophical Radicalism)の時代であつた。此の學派中に在

つて最も顯著なる者は Jeremy Bentham であつた。而して又た此の一派に峻嚴なるドグマチスト James Mill が居つた。Ricardo は全然彼れと相識るとなしとするも、當時の經濟問題に直面して之に關する幾多の重要な論稿を起したのであらうが、而も彼れの影響なくんば、彼れは其の「原理」を公にして、抽象經濟學を創始するが如きとはなかつたであらう。Ricardo は彼れが一般の讀者に向つて言説しつゝあるの時には、廣く其の熟通せる實生活上の事實に關する知識に基き、之れを所論の解明立證、若しくは前提として使用したのである。然るに其の「原理」に於ては同一の問題は彼れを圍れる現實世界に關説するとなくして論述せられる。彼れは一千八百二十年五月四日 Thomas Robert Malthus の Principles of Political Economy considered with a view to their practical application, 1820. を讀みて其の著者に送れる書翰中に曰く「我々の論争は或る點に於ては貴下が小生の書を以て小生が企圖せるよりも更らに實際的なるものを考ふるに歸し得可きものである」と小生は考へる。小生の目的は原理を闡明するに在つた、而して之れを行ふが爲めに小生は小生が是れ等の原理の作用を示し得可き強固なる場合を想像した」と。(Letters of David Ricardo to Thomas

Robert Malthus, 1810-1823, ed. by James Bojar, 1887, pp. 166-167; Alfred Marshall, Principles of Economics, vol. I, 5th ed., 1907, p. 813.)

Ricardo の「原理」は毫も系統的著書たることを要求するものではない。極めて遠慮勝ちなる人であつた Ricardo は彼れの學說の眞理を確信して疑はなかつたが、自己を以て正しく之れを解説し、表明するの能力なきものと認め、之れを公表することを躊躇して居つた。此の書は又は James Mill の懇請と激勵あるに非ざれば、斷じて公刊せらるゝことなく、又た起草せらるゝことがなかつたであらう。(John Stuart Mill, Autobiography, 1873, p. 27.) 此の著は初め出版の目的を以て著されたるものに非ずして、諸般の經濟上の難問題に關する彼れ自身の觀念を明確なる形態に於て表明し、私かに極めて少數の知己朋友間に配布するの目的を以て起稿せられたるものであると稱せられてゐる。斯くの如き見解にして正しいものであるとしたならば、此の書中に於て遭遇すること多き不完全なる論述は著しく辯明の餘地が大と爲るのである。或る者が既に自己の一般的態度を熟知する事明かなる人々の爲めに其の筆を執りつゝ、あつたとしたならば、彼れが其の讀者の胸中に

存すること確實なる假定及び條件を明確に叙述するを省略す可きは極めて自然の數であると云はなければならぬ。彼れの讀者は彼れ自身と等しく實際生活上の事實に關して廣汎なる知識を有する政治家及び實業家であつた。是に於て乎、彼れは其の論述の論理的完全に取つて必要缺く可らざるものではあつたが、彼れの讀者が明白なるものと看做す可き數多の事物を殊更らに省略したのである。

加之ならず、彼れは彼れ自ら一千八百二十年十月十日附の Malthus 宛書翰に於て告白せるが如く、言語を繰繰するの技に拙なく (“I am but a poor master of language.”) 是れが爲めに彼れは其の意味する所のものを十分に表明し得ざるの憾があつた。(Letters of Ricardo, op. cit., pp. 176-177)。<sup>1)</sup> 彼れの結論を解釋するが爲めに絶えず必要とせらるゝ説明と限定とは常に讀者自身によつて補給せられなければならぬ。補助的假定も推理の大部分の基礎を成すものも共に明瞭に表示せられてゐない。時には又た何等の説明なくして一の假定より他の假定に轉ずることがある。又た時間的要素に留意するの必要も充分に強調せられてゐない。彼れは彼れが説明することなき假設的の意義に言辭を使用しながら之れを説明することなく、又

た之れに固着することもない。是に於て乎、Marshall の語を借りて云へば、吾人にして Ricardo を正しく理解せんことを求むるならば、吾人は彼れ自身が Adam Smith を解釋せるよりも更らに寛大に解釋しなければならぬ。彼れの言辭が不明瞭なる場合には、吾人は其の述作中に於ける他の章句によつて指示せられたる解釋を之れに與へなければならぬ。吾人が彼れの眞に意味する所のものを探知するの希望を以て之れを行ふとするならば、彼れの學說は縱令ひ完璧を隔たること極めて遠きものであるとしても、之れに歸せしめらるゝの常なる誤謬の幾多のものより免るゝのである。(Marshall, op. cit., p. 81r.)。而して吾人が斯くの如く寛大なる解釋を下したる時、從來の客觀的價值學說と新たなる主觀的價值學說との間に存する矛盾は殆んど消滅し去らなければならぬ。

## 二

Ricardo に始まる純乎たる古典的價值理論は總べての價值、即ち使用價值も交換價值も共に「有用性」に依頼することを教ふるものである。そは決して Böhm-Bawerk の主張するが如く、單に效用のみによつて使用價值を説明し、費用のみによつて、任

意に増加し得る財貨の正常なる交換價值を説明せるものではない。(cf., Böhm-Bawerk, Artikel "Werth," im Handwörterbuch der Staatswissenschaften, herausgegeben von J. Conrad u. a., 2. Aufl., VII Bd., 1901, S. 752.)。Ricardo は有用性を以て交換價值に取つて絶對に必要なものと観る。彼れは或る貨物が如何なる方法に於ても有用でないとしたならば、換言すれば、其の貨物が如何なる方法に於ても吾人の満足に貢献することを得ないとしたならば、其の貨物は如何に稀少なりとするも、又た如何なる労働の高が之れを取得するが爲めに必要なりとするも、それは交換價值を缺く可きものであると做すのである。骨董品、奇觀書、古錢等の如き貨物の價值は之れを生産するが爲めに本原的に必要な労働量より全然獨立し、之れを領有せんことを欲する者の富及び思慕の程度を異にするに従つて相異なる。(Ricardo, On the Principles of Political Economy, 1817, pp. 1-3.)。而して彼れは又た常態に在つては一定期間精確に人類の欲望及び願望が要求する多寡の程度に於て持續的に供給せらるゝ貨物は一も存することなきが故に、價格の偶然的、一時的の變化を受けざるものは存することがないと説いてゐる。(ibid., pp. 82-83.)。

Ricardo は價值と富 (riches) との別を認める。Adam Smith の言ふが如く、人は人生の必需品、便益品及び娛樂品を享有し得るの程度に従つて或ひは富み、或ひは貧なるものであるならば、價值は本質的に富と異なるものである。(ibid., p. 377.)。彼れは爰に限界效用と全部效用との間の區別に赴く可き彼れの道を意識しつゝあるの觀がある。彼れは價值を以て生産の難易に依頼するものであつて、其の多寡に依つて定まるものに非ずと思惟する。製造業に従事する百萬人の労働は常に同一の價值を生産す可きであるが、而も常に同一の富を生産するものではあるまい。機械の發明、技巧の進歩、分勞の發達、及び更らに有利なる交換の行はる可き新市場の發見に由つて、百萬の人々は、一の社會狀態の下に於ては、彼れ等が他の社會狀態の下に於て生産し得る富の高の二倍若しくは三倍を生産することを得やう。而も彼れ等は是れが爲めに價值に對して何物をも附加することなかる可きである。蓋し凡ゆる物は之れを生産するの難易、即ち換言すれば、其の生産に使用せられたる労働の定量に準じて價值を上下するが故である。(ibid., pp. 377-378.)。Marshall は Ricardo が「富」によつて全部效用を意味するものと考へる、而して Ricardo は常に

價值が恰も購買者に取つて購入するに値するに過ぎざる貨物の部分より生ずる富の増量に相當すること、並びに一時的に刻下の偶發事の結果たると若しくは永續的に生産費増加の結果たるとを問はず、供給が不足を來したる場合には其の貨物より取得せらるゝ總富、即ち全部效用に於て減少あると同時に、價值によつて量定せらるゝ富の限界的増量に於て上騰あることを將さに叙述せんとしつゝあるものゝ如くである。Marshallを以て觀れば、Ricardoは其の全論述を通じて(微分學の簡明なる語法に就いて無識なりしが故に)彼れが總じて供給の抑制によつて限界效用は上昇し、而して全部效用は減殺せらるゝと云ふが如く精巧に之れを言説す可き正しき言辭を扼むことがなかつたとは言ひながら、之れを言説せんと試みつゝあつたのである。(Marshall, op. cit., p. 814.)

然しながら、Ricardoは效用の影響が比較的單純なるが故に之れを以て分明なるものと思惟し、之れに就いて言説す可き至要なるもの多からずと看做すと同時に、生産費と價值との間の關係が完全なる理解を得ることなく、此の問題に關する認見は課税及び財政の實際問題に於て國家をして正路を離れしむるの虞あるものと信じた。斯くて彼れは特に此の問題の解明に着手したのである。(ibid.)

彼れは其の第一章第一節に於て、社會の初期に在つては人間の努力によつて其の數量を増加せられ得るものであつて、又た其の生産に對して自由競争の無制限に作用する貨物の交換價值即ち一貨物の幾許が他のものに代へて與へらるゝ可きかを決定する標準は専ら其の各々に對して費されたる労働の比較的數量に依頼するものと考へた。(Ricardo, op. cit., pp. 3-4.) 而も Ricardoは其の第二項に於て、労働を以て凡ゆる價值の基礎と爲し、労働の相對的定量を以て貨物の比較的價値を決定するものと稱する際に、労働の異なる品質及び一事業に於ける一時間若しくは一日の労働と他の事業に於ける労働の同一期間とを比較するの困難に對して不注意なりと想像せらるゝを避くるに努めてゐる。労働の異なる品質に對する估料は直ちに凡ゆる實際的目的に對して十分なる精確を以て調整せらるゝに至り、そは労働者の比較的精練と遂行せられたる労働の強度に多く依頼する。其の品等は一度形成せられたる時は殆んど變化を受くることなきものである。飾職人一日の勞銀が普通労働者一日の勞銀の二倍であるとしたならば、一方の一

時間の勞作は他方の二時間の勞作に匹敵しなければならぬ。彼れ等の相對的勞銀に變化が存するとしたならば、固より彼れ等によつて作製せられたる物件の相對的價值にも之れに相當する變化が存す可きである。然も Ricardo は飾職人の勞銀をして普通勞働者の其れに比して一の世代より他の世代に互つて變化せしむる諸因を分析することなく、斯くの如き變動が大なること能はずと説くを以て満足したのである。即ち Ricardo が其の讀者の注意を惹かんと欲したる研究は貨物の相對的價值に於ける變化の影響に關するものであつて、其の絶對的價值に於ける其れに關するものに非ざるが故に、人間の勞働の相異なる種類が估料せらるゝ比較的度位を考査するは殆んど不要のものと爲るのである。(Ibid., pp. 12-14)。

次で彼れは第三節に於て、直接に貨物に適用せられたる勞働のみならず、其の助成資料に投入せらるゝ勞働も亦た其の價值に影響することを主張する。(Ibid., pp. 10-21)。

第四に貨物の生産に投入せられたる勞働量が其の相對的價值を支配すると做すの原理は器械及び其の他の固定的持續的資本の使用に由つて著しく變更せしめらるゝものと觀る。(Ibid., pp. 22-42)。

而して彼れは一千八百二十一年に

現れたる此の著の第三版に於て、相異なる資本の高が長短相同じからざる期間使用せらるゝに基ける相對的價值決定原理の變更を更らに強調する。頗る高價なる機械を以て、若しくは頗る高價なる建物の内に於て生産せられ、又は之れを市場に致すの以前に於て長期間を要する總べての貨物はより大なる生産費を要す可く、而して是れ等のものが市場に致さるゝの以前に於て経過せざるを得ざるより、長さ時間を補償するが爲めにより、有價值でなければならぬ。(Ibid., chap. i, sec. 4)。

最後に彼れは相變れる貨物の相對的價值が總べての勞銀の一齊に騰落する場合に、何等永續的影響を受くることなしと做すの原則も亦た資本の持續性等しからざること及びそが其の使用者によつて回収せらるゝ速度等しからざるの事實に由つて修正せらるゝものと觀る。(Ibid., sec. 5)。

是れに由つて觀れば Ricardo は斷じて勞働價值説の徹底せる主張者ではなかつた。個中の消息を了解せんとするものは更らに須らく彼れが一千八百二十年六月十三日附 McCulloch 宛の書翰を参照す可きである。(Letters of David Ricardo to John Ramsay McCulloch, 1816-1823, ed. by J. H. Hollander, Publications of the American Economic

Association, vol. X, No. 5-6, Sep. and Nov., 1895, p. 71.)。然るに彼れの學說が先づ第九世紀前半に於ける社會的不安の裡に發生せる英國社會主義者によつて承認せられ、利用せらるゝことゝ爲り、次いで獨の Karl Rodbertus 及び Karl Marx によつて、諸物の自然價值は惟り是れ等のものゝ上に費されたる勞働より成ると做すの叙述に對して其の權威を求めらるゝに至りたることは吾人が近く他の機會に於て言及せるが如くが如くである。(社會政策時報第五十三號所載拙稿「正價論と勞働價值學說」)。而も Ricardo 自身は早く後年の Marx 等の誤解を豫示せる Malthus の意見を訂正して居つた。曰く「Malthus 氏は一物件の費用と價值とが同一ならざるを得ざるものであると云ふことが余の學說の一部たるものであると思惟するの觀がある。彼れにして費用を以て、利潤を含める「生産費」を意味するものであるならば、それは同一である。上述の章句に於ては斯くの如きものは彼れの意味せざる所のものである。斯くて又た彼れは明かに余を理解せるものでなからむ。(Ricardo, op. cit., sec. 6.)。

## 三

而して一方に於ては Ricardo 經濟學の祖述者中に價值を以て全然勞働量によつて定まるものと做せる極端なる勞働價值學說の主張者を出すと共に、他方には英國經濟學に於ける需要供給法則の歴史主はとして Malthus, J. S. Mill, Cairnes 及び Marshall を經て進展するの運命を有してゐた。(前掲拙稿參照)。而して伊太利亞に於ては早く既に第十六世紀の交に在つて著しく效用を強調せる價值觀念が存して居つた。而して古典派經濟學の濫觴と略ぼ其の時を等しうしてジュネーヴの Jean Jacques Burlamaqui は效用を以て交換價值の前提なりと做すと共に、之れを以て其の高さの上に影響を有せざるものと認め、之れが動搖は偏に財貨の稀少性の變動に由つて説明せらるゝことを教へた。(Éléments du droit Naturel, 1775, p. 194 ff.)。Anne Robert Jacques Turgot はナポリの Ferdinando Galiani (Della Moneta, Libri Cinque, 1750.) に倣つて感情を通じて作用しつゝある條件の結果として心理學的主觀的に價值を説明した。(Valeurs et Monnaies.)。同じき時代は又た價值其の者を以て效用の上に基礎を有するものと思料せる Etienne Bonnot de Condillac (Le Commerce et le Gouvernement considérés relativement l'un à l'autre, 1776, pt. I. chap. i.) を生んだ。Louis François



de Grasin も亦た欲望を以て價值増減の原因と觀た。(Essai Analytique sur la Richesse et sur l'Impôt, 1767, pp. 51, 35 remarque, 22 remarque) 而して Physiocrates 學派の中心たる François Quesnay は無償效用と有償效用との區別を認め (Questions sur la population, l'agriculture et le commerce, Oeuvres, par Oncken, p. 288-290.) Abbé Morellet は效用を有せざる價值の存し得ざるを同時に、そは其の以上に被交換性を必要とすることを主張した。(Prospectus d'un nouveau dictionnaire du commerce, 1790.) 而して其の師 Quesnay の思想に對して更らに一層の精練を加へんことを期したる Le Trosne は價值原因を列擧して、第一、效用、第二、必要不可缺の費用、第三、物件の供給状態、第四、消費者及び販賣に提供せられたる産物の競争と做してゐる。(De l'intérêt social—Daire, Physiocrates, I, p. 980 ff.)

斯くの如き間に於て伊太利亞の經濟學者は依然として人間の欲望及び願望が凡ゆる價值の原因たることを教へて變らなかつた。Pompeo Neri は有用性を以て凡ゆる價值の基礎と做すと同時に、總べての價值が有用性に比例せざるの事實を認めて、價值決定上に於ける財貨の稀少及び其の收得の困難を強調する。(Osserva-

zioni sopra il prezzo legale delle monete, 1751, Custodi, Scrittori Classici Italiani di Economia Politica, Parte Antico, Tomo VI, p. 127 ff.) Antonio Genovesi は吾人の欲望が萬物の價值の第一根元であつて、大なる欲望を満足せしめ得るものは小なる欲望を満足せしめ得るものよりも大なる價值あることを力説する。而も彼れは何故に奢侈品が概して必需品よりも多くを費さしむるかの問題に逢着するに至つて、稀少性の原理に依らなければならなかつたのである。(Lezioni di Commercio ossia di Economia Civile, Biblioteca dell' Economista, Prima Serie, vol. III, 1852, p. 180 ff.) Marchese Cesare Bonessana de Beccaria も亦た彼れと等しく一財貨の交換價值を以て需要に正比し、財貨の高に反比して増減するものであると説く。彼れは斯くの如き一般法則によつて自然物の價值を説明する。而も彼れは一財貨の生産及び準備が人間の労働に負ふ可き限りに於ては價值が這般の労働の高、即ち必要なる労働時間及び労働者の數によつて決定せらるゝものと觀る。然し乍ら兩個の割合は労働時間中に消費せらるゝ生活資料の確定によつて單一のものに分解せられる。(Elementi di economia publica, Custodi, op. cit., Parte Moderna, Tomo XI, p. 344 ff.) Pietro Verri は價值を以て人々が或

る物件に就いて行ふ估料を表示する言なりと做し、欲望及び稀少性を以て價値の動因と觀、而して「欲望」(bisogno)を以て或る財貨に對する願望と同一視す可きものに非ずして、寧ろ人が其所望する貨物に對し、彼れが之に代へて交付せんとするものに優りて與へんとする選擇[la preferenza, l'eccesso della stima]なりと稱した。(Meditazioni sull' economia politica, 1771.—Biblioteca dell' Economista, Prima Serie, vol. III, p. 556 ff.)。而して第十八世紀に於けるヘネチア經濟學者中に在つて最も卓越せる Gianmaria Ortesは供給及び需要の作用を算術的法式によつて説明せんとし、價値が一財貨の需要に正比し、其の消費し得る高に反比を爲すを觀たのである。即ち  $V = \frac{r}{m}$  である。(il valore sarà non più che la ricerca de' beni, divisa per la massa consumabile di essi.) (Della economia nazionale, 1774.—Biblioteca dell' Economista, I. Serie, vol. III, p. 902 ff.)。

## 四

顧みて英國を觀るに Jeremy Bentham が其の Principles of Morals and Legislation, 1780. 及び A Table of the Springs of Human Action: shewing the Several Species of Pleasures and Pains of which Man's Nature is susceptible. 中に於て行へる欲望及び願望に關する奧妙なる

分析は甚大なる影響を有するものであつたが、然も彼れの Manual of Political Economy. は毫も之れに言及する所がなかつた。欲望に關する分析は輒近に至るも猶ほ佛國及び他の大陸學者の手に成れる大多數の經濟學上の述作中に看出さるゝ所であるが、英國學者が斯學に與へたる劃然たる境界は這般の論述を排斥するの傾向があつた。然も凡ゆる客觀的價值學說の反對者として、夙に Ricardo 流の理論を攻撃せる者に Samuel Bailey があつた。彼れは價値を以て其の究竟の意義に於て或る物件の受くる尊重を意味するの觀あるものと做し、進んで價値の特殊の感情が發生し得るは單に諸物件が選擇若しくは交換の目的物として相共に思料せらるゝ場合のみであると述べてゐる。吾人が諸物件を單獨に注視せる間は、吾人は是れ等のものに對する嘆美、若しくは愛好の大なる度位を感ずることはあり得るが、吾人は何等明確なる方法を以て吾人の情緒を表明することを得ない。然も吾人が兩物件を選択若しくは交換の目的物と看做すの時、吾人は其の感情を精確に表明するの力を取得するの觀がある。斯くて彼れは價値を以て、毫も確實的若しくは內在的のものに非ずして、單に兩物件が交換的貨物として相互に對する關係を

表示するに過ぎざるものであると定義する。(A Critical Dissertation on the Nature, Measures and Causes of Value, chiefly in Reference to the Writings of Mr. Ricardo and his followers, 1825, pp. 3-4.)。彼れは Ricardo の學徒が價值の凡ゆる原因を單一のものに分解し、斯くて經濟學の有することなき單純なる態様を之れに與へんと企圖するを歎じてゐる。(ibid., p. 231.)。

而して Sir Edward West は其の Price of Corn and Wages of Labour, with observations upon Dr. Smith's, Mr. Ricardo's, and Mr. Malthus's Doctrines upon those subjects; and an attempt at an exposition of the causes of the fluctuations of the price of corn during the last 30 years, 1826. に於て需要の内部組織を更らに善く分析せんとするの態度を採つた。彼れは凡ゆる貨物の價格は供給の及ぶ需要者の總體中に於て最も低き價格を支拂はんとしつゝある者の欲望及び資力によつて決定せらる可きであると做した。(ibid., p. 29.)。而も彼れは更らに進んで這般の注意中に看出され得る限界效用の觀念を表明することなく、却つて費用説を辯護するの立場に復歸する。曰く價格は供給及び需要の關係に依頼し、而して自由競争の行はるゝ際には、普通の利潤を伴へる生産費

を補償するの價格、即ち自然價格を生せしむるの傾向あるものであると。(ibid., p. 92.)。而して Nassau William Senior は凡ゆる物をして富の一部たらしむる三個の性質、即ち換言すれば之れに價值を與ふるもの、中、最も顯著なるものは凡ゆる種類の満足を包含せる快感を生じ、凡ゆる種類の不快を包含せる苦痛を防止する直接若くしは間接の力、即ち效用であると觀すると同時に其の第二の要素として供給の制限、第三の要素として可讓渡性を舉げ、而して是れ等三條件中に在つて他に超えて著しく重要なものは供給の制限なりと做し、其の價值に及ぼす影響の主たる源泉が多様愛(Love of variety)及び卓越愛(Love of distinction)なる人間性の最も有力なる原理中の二つであると思惟する。爰に彼れは人間の所要に於ける「多様の法則」(law of variety)を指摘し、生活の必需品は極めて少數にして、且つ單純なるものであつて、吾人は是れ等のものに關しては直ちに満足を感じ、而して其の享樂の範圍を擴張せんとを欲求する旨を述べる。(Encyclopedia Metropolitana, 1836, art. "Political Economy," p. 133; 3rd. ed. 1845, p. 11.)。

## 五

大陸に在つては Nicholas François Canard は經濟生活が自然的單純の状態に在る場合には財貨の價值は使費せられ、且つ交換せられ得る勞働の高と均衡を保たざる可らざるも、而も近代の經濟生活に於ては單に勞働時間のみによつて價值を量定し得るものに非ずと説く。蓋し熟練勞働は熟練の程度を異にせる多數のものに分たるゝこと餘りに大なるが故である。彼れを以て觀れば、價格は實に相對立せる欲望に指導せられたる買手及び賣手間の妥協によつて成立するものである。

(Principes d'économie politique, ouvrage couronné par l'Institut, 1801, ch. i. iii.)。而して先づ價值問題の主觀的方面を高唱して、應がて費用價值説に移れる者に J. B. Say がある。(Traité d'économie politique, Livre I. chap. i, Livre II. chap. i.)。次いで價值が人間の勞働より發生するの事實を特に強調しながらも、事實上 Say の道に移れるものに Antoine Louis Claude Destutt de Tracy があつた。(Traité d'économie politique, 1823, chap. 3.)。而して J. B. Say の弟 Louis Auguste Say は財貨の效用に關しては同一物が別個の人々、特に富者及び貧者に對して全然相違し得ることを注意した。彼れは一財貨の效用の度位を以て吾人が個人的所得の減少に連れて順次に孰れの欲望滿足の對象を斷

念せんとするかを求むる方法に於て見積らるゝものと思惟した。(Traité élémentaire de la richesse individuelle et de la richesse publique, 1827, Livre I. ch. vii et iii.)。又た價值を以て凡ゆる財貨の其れと等しく稀少性(rareté)より生ずるものと做し、而して「稀少性」を以て一財貨の高が這般の財貨に對する欲望の總高に對する關係なりと觀るものに Antoine Auguste Walras のあつたことも固より記憶せられなければならぬ。

(De la nature de la richesse et de l'origine de la valeur, 1831, ch. xii et xi.)。

又た Pellegrino Luigi Edoardo Rossi を於て觀れば、價值は先づ效用に依頼し、效用は又た其れ自體吾人の欲望の可變的限界及び相對的精力に服従する。是に於て乎、價值は不變なる事項にも、亦た客體に固有なる性質でもない。或る物體と吾人の欲望の一との間に存する滿足の關係を制壓すれば、使用價值は消失し、而して是れと共に交換價值も亦た消失する。「價值に在つては全然客觀的なる何物も存することがない」。而して彼れは一物體の交換價值を以て惟りそが使用價值を有すると云ふ假定の下に於てのみ存在するものと思惟する。(Cours d'économie politique, tome I. 1840, 3me leçon, p. 54-58, passim.)。而も彼れも亦た無制限なる競争の行はるゝ際に

は固より斯くの如きは、實際上完全に實現せらるゝこと斷じてなきものではあるが、物價は生産費に依つて決定せられ、自然的價格階段を形成する一定の水準に歸せしめらるゝものと觀る。(ibid., 3me leçon etc.)。他方に於て獨の Friedrich Benedikt Wilhelm von Hermann は Bentham を研究して欲望の分類を行ひ。(Statwirtschaftliche Untersuchungen, 1832, II.) 其の先人よりも更らに周到なる注意を以て需要及び供給を分析し價值決定の特殊要素を論述した。(a. a. O., S. 74, 82-88.)。

## 六

英人にして數年間獨逸に居住し、當時英國に於て殆んど知られなかつた大陸諸學者の著作を研究し、殊に Hermann 及び Rossi に負ふ所大なる者に T. E. Barfield があつた。彼れは第一の欲望の満足は直ちに第二のものを喚起し、食料が豊富と爲るに比例して、他の諸欲望は其の地位を高め、而して其の種々なる壓迫の度位に依つて分類せらる可き、絶えず擴大しつゝある願望の連系が喚起せらるゝと做すの公理を表明したのである。(Four Lectures on the Organisation of Industry, delivered at Cambridge, 1844, pub. 1845, Lec. III, p. 60.)。尙ほ最も明白に效用法則の本質と意義と

を諒知せるの觀ある者に Richard Jennings が居つた。(Natural Elements of Political Economy, 1855, pp. 96-99.)。長く忘れたる佛の Antoine Augustin Cournot 及び Etienne Juvenal Dupuit 獨の Hermann Heinrich Gossen 並びに蘇の John Craig 愛の Mountfort Longfield 及び英の Rev. William Foster Lloyd 等は暫く之れを描くとするも、尙ほ以上の諸著は Jevons の前に存して居つたのである。

William Stanley Jevons が「考察と研究との反復は余を導いて價值は全然效用に依頼すと云へる稍や新奇なる意見に到達せしめた」と道破せるの時、そは不注意なる約言を以て、價值を生産費に依頼するものと做せる舊經濟學者の意見よりも却つて一方的なるものであつた。彼れは語を續けて曰く、方今勢力ある諸意見は效用よりも寧ろ勞働を以て價值の起源と做してゐる。而して明確に勞働は價值の原因なりと主張する者すら存する。余は之れに反して供給及び需要の常則が必然的に結果す可き満足なる交換理論に到達するが爲めには吾人は單に吾人の領有する貨物の定量に依頼しつゝあるものとして效用變化の自然法を周到に探究す可きものなるを示すのである。(中略)。勞働は供給の増加若しくは制限を通じ

て貨物の效用の程度を變ずるに由つて唯だ單に間接の方法を以て屢々價值を決定するものと認められる」云。(Theory of Political Economy, 1871, pp. 1-2.) 然も古典的經濟學者は效用變化の自然法を以て詳細なる説明を要するには餘りに明瞭なりと看做した。而して彼れ等は生産費にして生産者が購賣に提供する高の上に何等の影響をも有すること能はざるものであるとするならば、それは交換價值の上に何等の影響をも有すること能はざるを承認した。彼れ等の學說は供給に關して眞なるものが、必要な點を變ずれば、需要に就いても亦た眞なるものであり、而して一貨物の效用にして生産者が市場より撤去する高の上に何等の影響をも有すること能はずとしたならば、それは其の交換價值の上に何等の影響をも有すること能はざるを包意するものである。(Marshall, op. cit., p. 817.)

舊來の價值學說は決して價值の成立するが爲めには有用性と有限性が共働せざる可らざることを看過せるものではなかつた。嘗だに新主觀的價值論の先蹤として好んで引證せらるゝ Galiani 及び Furgot 等が之れを認識せるのみならず、Ricardo に於てすら然るものであつた。古典的價值學說は嘗だに獨占財のみならず、總べての財貨に對して價值を決定せるものとして稀少性及び勞働投下を認めた。勞働も亦た一の稀少にして其の使用の限定せられたる資料である。古典的價值學說は二種類の財貨を區別し、而して勞働によつて増加し得ざる財貨の價値は「有用性と稀少性」に依頼し、勞働によつて増加し得ざる財貨は「有用性と勞働投下」に基くものと教ふるのである。(Heinrich Dietzel, Theoretische Socialökonomik, I. Bd. Einleitung, Allgemeiner Theil, Buch I. 1895, S. 228 f, 230 f, 232 f.) 斯く觀じ來れば Marshall 等によつて企圖せられたる限界效用説と費用説との結合は、決して新たな想念に非ずして、既に古典的價值學說中に存したるものを更らに周到精確なる用語を以て表明せんとせるに過ぎざるものである。